



大阪府立北野高等学校図書館

第 6 号

2017. 2. 27 発行

～ 次のステージに進む皆さんへ 贈る言葉にかえて ～

大学に入学して焦ったことは、都会の駅の構内の歩きにくさでも一人暮らしの家事の煩雑さでもなく、自分の読書量の少なさだった。中学校の図書室はどこにあったか思い出せず、高校の図書館の扉の向こうを見たことがない。暮らしてゆくのに困ったことはなかったけれど、生きてゆくのにこんなにも恥ずかしいことだと知らなかった。自分はもったいないことをしていたと知った、悔しさにも似た恥ずかしさである。

閑話休題。あまり本を読まなかった私だが、小学校3年生くらいから新聞だけは欠かさず毎日読んでいた。今なおその習慣は続いていて、自分のなけなしの知識・教養は、ほぼ新聞によるものだと思っている。最近、**外山滋比古氏**が『**新聞大学**』（070/㊦6/1）という著書を発刊した。御歳 93 才の文学博士で言語学者の氏は、自分の若いころからの習慣である「新聞を読むこと」が自分に「効いている」と実感。

【学費ゼロ】【毎日届く】【自宅でできる】【最新の情報満載】、いくつになっても、誰でもどこでもまなべる最良のテキスト「新聞」を使って「知の大学」に学ぼうと呼びかける。新聞の記事から広告にいたるまでのそれぞれの「読み方」を、味わいあるエッセー調で「講義」してくれる。教養や思考力がほしい人には、私からも「入学」をぜひお勧めする。

必要に迫られず（学生時代は読書を半ば強制される場合があるものだ）、自ら興味を持って読んだ作品として記憶しているのは、**G・オーウェル**『**動物農場**』（081/I1 - 8/262 - 4）だ。高校一年生の時だったか、国語の授業中に先生に紹介された。「豚が政治革命を起こすという話だが、まあなかなかの佳作と言ってよからう。」程度だったと思うが、その先生が普段何かを褒めるということを滅多にされない方だったので、まずその点で興味をひかれた。人間たちにいいようにされている農場の動物たちが反乱をおこす。老豚をリーダーにした動物たちは、人間を追放し、「すべての動物が平等」な理想社会を建設しようとする。しかし、指導者となった豚たちは権力を欲しいままにし… 最近、某・民主主義の大国で「大変革」を声高に叫ぶリーダーが立った。支持者たちは興奮気味に「変革」を期待し、選ばれた彼は自国民の幸福最優先を掲げ大奮闘（？）している。『動物農場』はもともと、ロシア革命を風刺し、共産党独裁を痛撃する作品であるが、連日かのリーダーの様子が報道されるのを見ながら、私はあの小さな農場の「変革」の結末を思い出している。

ところで、政治の話とは別に、私も「変」に惹かれる。「変」は「普通」や「当然」とは異なるものに対して使う。一方、何かを「普通」という根拠は「自分」である場合がほとんどだ。自分の手持ちの知識、あるいは価値観で捉えられるものが「普通」であり、そうできない何かに出会うと「変」だと思う。しかし、だからこそ「変」なものは魅力的だ。それは新しい世界への導きになる。知らない「変」な何かに出会い、驚き、考えることは、何とも楽しいことではないか。

「たらばかに③【〈鱈場〉蟹】北方の海でたくさんとれるカニによく似た節足動物。大形で肉がおいしく、缶詰にする。」
缶詰にしない鱈場蟹だっているんじゃないかと思うが、・・・（後略）

赤瀬川原平『**新解さんの謎**』（914/A2/3）の一部である。国語辞典を「引く」のではなく、「読む」。読んで、味わい楽しむ。国語教師として辞書は非常に身近だが、この本を見つけた時には、その変な視点が新鮮だった。そして辞書の言葉の定義・説明を、当然正しいものと思っている自分に苦笑した。現実には、「当然」と思っているものこそ、かなり「変」だったりするのだ。それにしても、言葉は広くて深い。辞書という書物は面白い。ぜひ辞書を一読されよ。

皆が辞書を手に取れば、きっと泣いて喜ぶ人たちがいる。**三浦しをん**『**舟を編む**』（913/M80/5）は、一冊の辞書を作るためにある限りの情熱を注ぐ人たちの物語だ。広く深いことばの海に舟を漕ぎだす者たち。場所は違えど、装丁の色・紙の手触りなどに技術のすべてで共に戦う者たち。そのこだわり方と熱量は、世間で彼らを「ちょっと変」な人たちにする。しかし、この作品を読んだ後に湧くその愛しさ、まぶしさには、胸が迫る。

さて、「辞書をきちんと読んだことがない」と言っても別に恥ずかしくはないが、読んだことがないと人に知られると恥ずかしいような文学作品はある。本に関わる仕事をしている**岸本佐知子** **三浦しをん** **吉田篤弘** **吉田浩美**による『**罪と罰**』を**読まない**』（984/K1/1）は、かの名著『罪と罰』を読んだことがないまま、小説の最初と最後のページずつだけをまずは手掛かりに、「こんなんじゃない？」と四人で勝手に物語を推測していくという、「読まない読書会」の記録。やってることも、本編中で言ってることもとにかく「変」満載なのであるが、あとがきが秀逸。

『罪と罰』をまだ一文字も読んでいないときから、われわれ四人は必死に「読んで」いました。いったいどんな物語なのか。期待に胸をふくらませ、夢中になって、「ああでもない、こうでもない」と語りあいました。それはなんと楽しい経験だったことでしょう。（中略）
もしかしたら「読む」は「読まない」うちから、すでにはじまっているのかもしれない。（中略）
読んでいなくても「読む」は始まっているし、読み終えても「読む」は続いているからです。（中略）
本は待ってくれます。だから私は本が好きなのだと、改めて感じました。

「読書の喜び」を知っている人と知らない人とは、間違いなく大きな差がある。この紙面で取り上げた作品は、巨編でもなければ難解でも重厚でもないものばかりだ。乱暴な言い方になるが、何でもいい。とにかく一ページでも何か読んだほうがいい。ある識者が、若い人たちに向けて言っている。

「今のうちに、どれだけ心の大地を読書によって耕したか。それで決まってしまう。十分に耕され、養分を豊かにもった大地であれば、大樹はいくらでも伸びていける。」
カチカチの心にならぬよう、小さく狭いままで終わらぬよう、新しい「変」なものを探しながら、大いに読書しよう。